

障がいと共に生きるアーティスト達と
そこにある世界を発信するフリーペーパー

Hugs

はぐす について

「Hug」という言葉には、“愛情をもって抱きしめる” “こだわりを守り続ける” “自分自身を幸運だと思う”などの意味があります。フリーペーパーHugsは、障がいと共に生きながら創作や表現活動をしている方々や施設取材し、その活動の様子や日々の思い、そこから広がる豊かな世界を伝えていくことを目的にしています。

創刊から福祉施設を紹介してきましたが、今年度から個人やプロジェクト等にも焦点を当てた内容にしています。またnoteでの発信を中心にし、フリーペーパーはダイジェスト版として発行してまいります。

https://note.com/freepaper_hugs/
こちらのQRコードからもアクセス可能です。



あいサポート・アートセンターからのお知らせ

鳥取県立バリアフリー美術館の 企画展示室を更新しました！

令和6年度あいサポート・アートとっとり展の受賞作品（美術部門の最優秀賞～佳作までの35点、文芸部門の最優秀賞～銅賞までの4点、マンガ部門の最優秀賞～銅賞までの4点）を展示しています。ぜひ、ご鑑賞ください！



▲鳥取県立バリアフリー美術館公式サイトはこちら

あいサポート・アートセンターのお仕事紹介

鳥取県立バリアフリー美術館の管理運営

鳥取県立バリアフリー美術館とは、障がいのあるアーティストの作品に特化したオンライン上の美術館だよ。鳥取県内の作品を調査し、デジタルアーカイブとして管理、保管、公開しているよ。

デジタルアーカイブ化された作品の中から、鳥取県を代表する作品の常設展示やあいサポート・アートとっとり展の入賞作品による企画展などの開催も行っているよ。



Hugs 次号のお知らせ

2025年 夏頃 発行予定

内 容:未定

編集後記

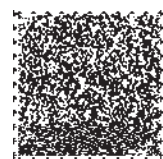
価値観や視点は、ある日、急に変わることがある。社会の中で、スポットが当たりにくかったことや、固定概念で見ていたものが、急に変わる。山陰ご当地フォントプロジェクト取材させてもらい、この絵がこの図柄になるのかと素直に驚いた。デザインにはそういう力があると改めて教えてもらった。鹿野第二かちみ園の藤崎園長が言うように、これまで以上にアートを通じて双方向（作者と作品を見た人たち）に影響し合うことが増えてきそう。この活動が障がいというもの見え方に一石を投じるかもしれないし、そうなることを期待したい。

藤田和俊

Hugs 2025年初春号 vol.11 / 2025年3月1日発行

発行／あいサポート・アートセンター
〒682-0018 鳥取県倉吉市福庭町1丁目105番地2
TEL/FAX:0858-33-5151
E-MAIL:tottori.asac@gmail.com
HP:<https://aisapo.art/>

取材・編集・撮影／合同会社 僕ら
藤田和俊
デザイン／森下真后
協力／鳥取県



これは「Uni-Voice」という
音声コードです

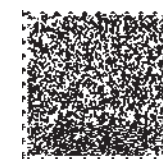
障がいと共に生きるアーティスト達とそこにある世界を発信するフリーペーパー

Hugs

はぐす

2025年初春号 vol.11

特集 山陰ご当地フォントプロジェクト
デザインで開く、
社会への扉



これは「Uni-Voice」という
音声コードです

山陰ご当地フォントプロジェクト

障がいのある人たちが社会の中で活躍できる場を増やしたい。山陰のデザイナーたちが集結し、障がい者アートの魅力をデザインでより引き出す「山陰ご当地フォントプロジェクト」が2023年から始まった。就労継続支援B型事業所での工賃（給与）は、労働基準法上の「労働者」に該当せず通常の最低賃金を下回ることが多く（鳥取県の月額平均工賃は2万円を超える程度が現状）、そういった社会課題の解決を目指すと同時に、障がいのある人にとってもやりがいを持つきっかけになっている。主催するCOOD CREATORSの遠藤亨さんと石川誠規さんに話を伺った。



一般社団法人 COOD CREATORS 左：石川誠規さん 右：遠藤亨さん

デザイナー×障がい者アート

「障がいのあるお子さんを持つ知り合いの方と話すことがあり、その子が将来どうやって収入を得ていくか不安だとおっしゃられていて。そういった社会課題の解決に何かできないかと思いました」

米子市で広告代理店を経営する遠藤さんは、元同僚でデザイナーの石川さんに相談。デザイナーたちが在籍するJAGDA（公益社団法人日本グラフィックデザイン協会）の鳥取地区代表を務めている石川さんが思いついたのが、協会のつながりで知っていたシブヤフォント。障がいのある人が書いた文字や絵を基に、フォントやデザインパターンを作り、それを商品化につなげて収益を得て還元する取り組みだった。

「全国に取り組みを広げるためにノウハウを教えてもらえるタイミングで、全国10カ所のご当地の方々と共にスタートを切りました。障がいのある人と関わる機会はそれまでほとんどなく、一緒に何かを作ることに不安がないわけではなかったんですが、動き出してみることにしました」（石川）

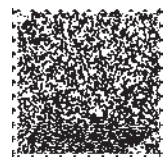
あいサポート・アートセンターがパイプ役となって施設を紹介。県の補助金なども活用し、実行委員会が立ち上がって2023年にキックオフイベントが行われ、2024年4月には一般社団法人「COOD CREATORS」が発足した。CO（一緒に）+GOOD（良くする）=COOD。障がいとデザイン。これまで接点が少なかった領域がつながり、新たな扉が開き始めた。



それぞれが持つ個性や魅力をデザインする

取り組み方は2つあって、一つが、現在16人いるデザイナーが山陰両県9施設（鳥取県8、島根県1）を定期的に訪問し、コミュニケーションを取りながら文字や描いた絵をフォントやパターンにデザインする「CO-CREATION」。もう一つが鳥取県立バリアフリー美術館の収蔵作品や既に完成している作品を使ってデザインする「COLLABORATION」だ。

「デザイナーが勝手に作りたいものを作るというよりは、それぞれの人の個性や作品の魅



これは「Uni-Voice」という音声コードです



▲施設での活動の様子（NPO法人いるか）



▲施設での活動の様子（NPO法人あかり広場）

力そのものをベースに守りながら、それを活かしたデザインにすることを心がけています」（遠藤）

自閉症や知的障がいのある人たちが黙々と筆を走らせる隣で、寄り添うようにデザイナーたちは会話する。何が好きなのか。どういう気持ちで描いているのか。いろいろな話をしながら、その人自身を知ろうとする。

「バスが好きな人がずっと細かくバスを描いたり、戦隊モノが好きな人はひたすらヒーローを描いたり。すごく特徴があるし、絵がすごく平面的で大胆。そして、自由さを忘れていない絵が多い。どう生かそうかと、デザイナーごとに感性を働かせています」（石川）

サイズや配置、カラーを変えて多彩なパターンを創作。現在、パターンは約53種類、フォントは6フォントができています（2月6日現在）

意識の変化と、社会への広がり

プロジェクトは、施設スタッフにとっても気づきになっている。鳥取市鹿野町の障害者支援施設「鹿野第二かちみ園」の藤崎慎一園長は、作品がデザイン

の力で生まれ変わったことに驚いたという。「園主催の個展で展示し終わったら保管するくらいだったので、作品を売るとか貸し出す発想自体がなかったです。デザイナーさんの手にかかるこんな風になるんだと驚きました。つつい狭い世界になりがちだけど、こういう繋がりです新しい風が入ると思います」

山陰ご当地フォントの作品は、鳥取県庁内通路に大きなパネルとなって鮮やかに装飾されているほか、コンビニエンスストアのファミリーマートが店内設置のマルチコピー機のサービス「ファミマプリント」で採用。全12種類のシールが販売された（2025年1月末に第1弾は終了）。また、大阪・関西万博の鳥取県ユニフォームのスクarf柄に採用されるなど、どんどん社会に広がりつつあり、遠藤さんは手応えを感じている。

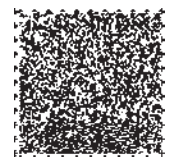
「アートに障がいの有無は関係ないと思います。普段のクライアントワークとも違い、一緒に創作活動をしなが社会課題の解決につながることができ、やりがいにもなります。今後、企業ブランディングやCSR活動など、もっといろんなところで使ってもらえるよう、広げていきたいです」



鹿野第二かちみ園 左：太田久美さん 右：藤崎慎一さん

▼鳥取県庁内通路

▼「ファミマプリント」12種類



これは「Uni-Voice」という音声コードです